

☆HPVワクチンは日本では今どうなっているの？

日本では、HPVワクチンは、2013年4月に予防接種法に基づく定期接種となっていますが、ワクチン接種後に体の広い範囲で持続する痛みなどの重篤な副反応の疑いがあるという報道があり、同年6月に厚生労働省から「副反応の発生頻度がより明らかになり、適切な情報提供ができるまでの間、積極的な接種の勧奨を差し控える」との勧告があり、多くの市町村長の判断で接種対象者に対する個別通知を控えています。そのため、積極的勧奨差し控えの勧告前には、公費助成対象者の70%以上あった接種率は、HPVワクチンは現在でも定期接種として接種可能なワクチンであるにもかかわらず、0.3%以下と激減しており、今では公費助成対象である女子のほとんどが接種していないという状況です。

WHOは、日本での近年のHPVワクチンの勧奨中止を憂慮する旨の声明を発表していますが、最近では、2013年以降に明らかとなったHPVワクチンの効果や副反応に関する新しい調査結果を正しく伝えることで、日本における接種者も少しずつ増えてきています。

2020/1の厚生労働省の検討部会では、公費助成の接種対象者のいる家庭に、自治体を通じて、HPVワクチンの効果やリスクなどを知ってもらうための冊子とともに、各自治体で接種できる医療機関などの情報も併せて周知するために個別送付する方針を打ち出しています。

HPVワクチンに関する経緯や最新の情報は、厚生労働省のホームページに詳細に記載がありますのでご覧ください。

厚生労働省 HPVワクチン

検索

☆HPVワクチン接種後に起こりえる主な症状は、 どういうことがあるの？

HPVワクチンは筋肉注射で、接種後にみられる主な症状には、接種部位の痛みや腫れ、赤みがあります。

また、ワクチンを接種した後に、接種部位以外で、広い範囲に広がる痛みや、手足の動かしにくさ、などを中心とする多様な症状が起きたことが報告されていますが、HPVワクチン接種歴のない方においても、同様の症状を有する方が一定数おられることが、明らかとなっています。

最近の大規模調査では、これらの多様な症状とHPVワクチンとの間にはなんら因果関係はないと報告されています。

HPVワクチン接種の有無にかかわらず、思春期に多いとされる、多様な症状が長く続き回復が難しい方がいるのも事実なので、早期から専門的な診療が必要な場合もあります。

小学6年生から高校1年生の公費助成の対象である女子は、「積極的な接種勧奨の差し控え」の間であっても、万一、HPVワクチン接種後に重篤な副反応が生じた場合は、予防接種法に基づく救済制度の申請は可能です。

☆ HPVワクチンを受けるのを決めるには、どうしたらよいの？

他のウイルスによる病気を防ぐワクチンを受ける時と同じですが、HPVワクチンについては、厚生労働省の作成したリーフレット「HPVワクチンの接種を検討しているお子様と保護者の方へ」に詳細な情報が記載されていますので、是非参考にされて、HPVワクチンの「意義・効果」と「接種後に起こりえる症状」について、ご自身とご家族でよく理解・確認されたうえで、決められることが大切です。

HPVワクチンの対象者は、公費助成で無料となる定期接種は、小学校6年生～高校1年生の女子ですので、6か月の期間で、3回の接種が必要なため、接種希望者は、高校1年の遅くとも9月までに1回目を始める必要があることは覚えておかれてください。

HPVワクチン接種を希望される場合は、性交渉開始前の思春期に接種することが最も効果的です。

もちろん、ワクチンの有効性が証明されている年齢層である45歳までの女性なら、任意接種（自費）で誰でも受けることはできます。既に感染しているHPV感染や前がん病変に対する治療効果はありませんが、まだ感染していないHPV16型/18型の将来の感染を予防することはできます。

☆万一、ワクチン接種後に症状が生じた場合は、 どうしたらよいの？

HPVワクチン接種後に気になる症状が生じた場合は、すぐに接種を受けた医療機関でご相談ください。

山口県内には、HPVワクチン接種後に生じた症状の診療に係る協力医療機関を、山口大学医学部附属病院（脳神経内科・整形外科）に設置してあります。

子宮頸がんの
主な原因は
ウイルス感染です！

まずは、
HPV ワクチンに
関する情報を
知ることが
大切です！

産婦人科医

“ HPVワクチン ”
って、
知っちゃう？

山口県産婦人科医会

☆子宮頸がんは、「HPVワクチン」で予防できるの て、本当？

はい、そうなんです。

子宮頸がんは、子宮の入口（頸部）にできるガンで、日本全体で、年間に約1万人が罹り、約2,800人が亡くなっている重大な疾患なのですが、すでに海外で140か国以上で承認されている、「HPVワクチン」という子宮頸がんを予防できる3種類のワクチン（2価ワクチン、4価ワクチン、9価ワクチン）があります。

世界保健機関(WHO)では、「HPVワクチンは極めて安全性の高い有用なワクチンである」と評価されており、HPVワクチンの接種率が高い国では、子宮頸がんの原因ウイルスであるHPV感染や子宮頸がんの前がん病変が減少しており、将来子宮頸がんの撲滅が期待されている時代です。

☆どうして、子宮頸がんは、「予防できるがん！」 て、分かったの？

2008年のノーベル医学・生理学賞を受賞されたドイツのハルト・ツア・ハウゼン博士って、ニュースで聞いたことなかったでしょうか？

博士は、女性特有のがんの中で、2番目に多い子宮頸がんの主要原因が、特定のタイプのヒトパピローマウイルス（HPV）であるとする「ウイルス説」を早くから唱えられていて、多くの基礎的研究の成果によって、1983年に、子宮頸がん組織から、HPV16型および18型を分離し、博士の学説を立証し、子宮頸がんの予防ワクチンの開発へと研究の道を拓いたんです。

人類を脅かす致死的な病気である子宮頸がんを引き起こす原因であるHPVを発見し、子宮頸がん予防ワクチンの道を広げたことが、高く評価されたということです。

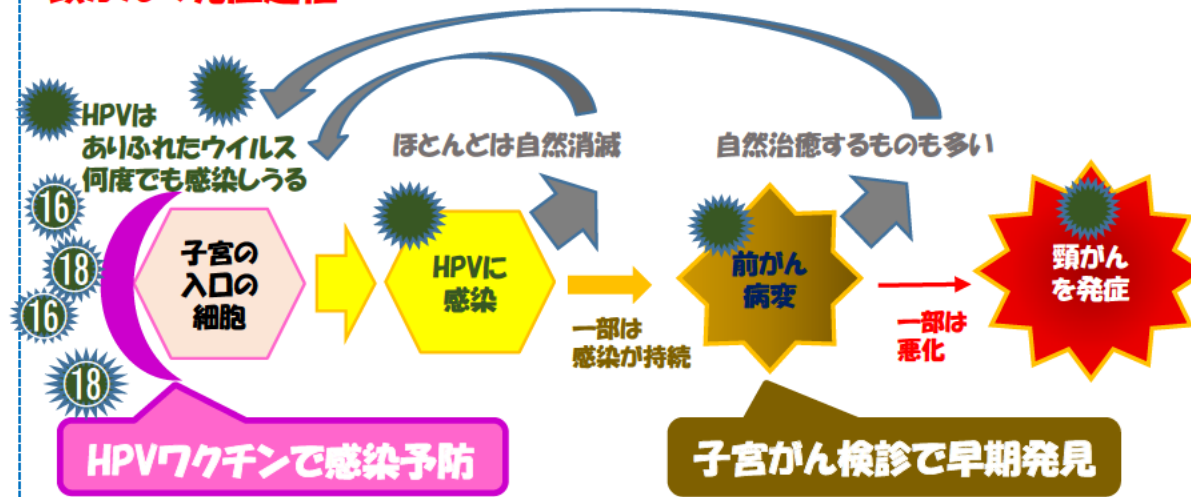
☆「HPV」って、どんなウイルス？

HPVは、100種類以上あって、広くまん延しているウイルスなのですが、がん化に関わるHPVは、ハイリスク HPVと呼ばれ、約15種類あって、主に性的接触により感染するとされています。ハウゼン博士が発見された16型と18型のHPVが、子宮頸がんの原因ウイルスとして50～70%を占めています。また20代～30代で発症する子宮頸がんでは、この2種の型で80%を超えており、他のハイリスクHPVよりも、がんへの進展が早いとされています。

この16型と18型に対する予防ワクチンが、2価ワクチンなのです。4価ワクチンは、さらに、HPV6型/11型の感染も予防し、尖圭コンジローマという疣を作る病気の予防効果もあります。また、海外で主流になりつつある9価ワクチンは、4価ワクチンの効果に加えて、ハイリスク型である、HPV31/33/45/52/58型にも予防効果があります。

HPVワクチンは、子宮頸がんをひきおこすウイルス感染を防ぎます

頸がんの発症過程



☆ HPVに感染すると、どうなるの？

HPVに感染すること自体は特別なことではなく、性交渉の経験のある女性であれば70～80%は生涯に一度は感染するといわれています。

ほとんどの場合、自身の免疫力によって、HPVは、自然に排除されるような、一過性の感染なのですが、HPVが排除されずに、持続感染をおこしてしまうと、子宮頸部上皮内腫瘍（CIN）と呼ばれる前がん病変を引き起こします。

CINには、CIN1, 2, 3の3段階があり、軽い段階のものは、ほとんどは自然に治癒しますが、がんの一手手前の前がん状態であるCIN3の段階では、外科的な治療が必要となります。CIN3を治療しなければ、数年をかけて、がん化していくと考えられているからです。だから、進行した子宮頸がんは、ありふれたHPV感染がひきおこす重大な病気としてとらえることができるのです。

☆HPVに感染したり、前がん病変にかかっても自分 ではわからないの？

はい、まったく症状はないので、自分ではわからないのです。この状態を見つけるには、定期的な子宮がん検診を受けることで、はじめて可能となるのです。

☆子宮頸がんの原因は、HPVというウイルス感染 だから、ワクチンがあるんですね！

そうです。他のウイルスが引き起こす感染症と同じように、子宮頸がんを引き起こすHPVウイルス感染も、ワクチンで防げるのです。ですから、子宮頸がんは、「本来予防すべき疾患」といえるでしょう。

☆HPVワクチンは、どんな効果があるの？

HPVワクチンは、HPV16型/18型の感染を、ほぼ100%予防するので、2価または4価ワクチンを接種すれば、子宮頸がんの50～70%を予防することが期待されます（9価ワクチンは日本では承認申請中）。特に若い世代で発症する頸がんを減らす効果は大きいでしょう。

実際、HPVワクチン接種により、前がん病変で子宮頸部を部分的に切除する円錐切除術という外科的な治療が必要となるCIN3を減らすことが明らかとなっています。前がん病変のピークは、妊娠・出産年齢の20～30歳代ですから、HPVワクチンにより、妊娠時の流産や早産のリスクとなる円錐切除術を受ける若い女性を減らすことも、意義があることです。

ただ、HPVワクチンを接種しても、HPV16/18型以外のHPVが引き起こす前がん病変や子宮頸がんを防ぐことはできないので、2年に一度の定期的な子宮がん検診も必要なので、忘れないで受けましょう。

☆若い世代で子宮頸がんが増えているのって、本当？

はい、子宮頸がんは、女性なら誰でも何歳でも罹りますが、近年、若い世代で増加しており、20代の女性の死亡率では、最も高いがんになっています。

若い年齢で発症する子宮頸がんでは、HPV16/18型の割合が80%をこえるため、HPVワクチンを希望される場合には、性交渉を行う前の思春期に接種することが最も効果的です。

性交渉の経験のある女性は、20歳を超えたら、定期的な子宮がん検診をお勧めします。また、**HPVワクチンを接種していても、HPV16/18型以外のハイリスクHPVが引き起こす子宮頸がんを予防できないので、子宮頸がん検診をきちんと受ける習慣を身につけておきましょう。**最近、HPVワクチン接種された方のほうが、未接種の方に比べて、20歳での子宮がん検診受診率が上昇すると報告されており、早くから病気について知っておくことは、予防できる病気をきちんと防ぐ大切な行動につながると言えるでしょう。

☆子宮頸がん検診って、どんな感じ？

子宮の入口（頸部）の細胞をとって顕微鏡で観察して、がんや前がん病変を疑う細胞の変化があるかを調べます。細胞は、内診台に横になっていただいて腔の中に小さい専用の器具をいれて、子宮頸部から採取しますが、**痛みはほとんどありませんし、時間もかかりません。**

平成30年度の山口県の市町子宮がん検診では、受診率は16.8%と低く、精密検査が必要とされた方の3割は精密検査を受けておられず、問題です。子宮頸がん検診で精密検査が必要といわれると、がんなのかと怖くなりますが、要精検で「がん」であった割合は、1.7%でした。精密検査で見つかる病気のほとんどは前がん病変で、自然に消えていく経過を確かめることで、進行がんを防ぐことにつながるのです。また、がん検診がきっかけでみつかる子宮頸がんは、比較的早期なものが多く、治療で十分治る可能性が高いので、きちんと精密検査を受けましょう。進行した子宮頸がんで見つかる場合の多くは、定期的ながん検診や精密検査を受けておられないという現状があります。

☆頸がんを防ぐための大切なこと、わかった！

「HPVワクチン接種」と「子宮がん検診受診」の二つの手段で、ウイルス感染が引き起こす頸がんを、防げるようになっているのです。

子宮頸がんは、“防げる病気”であることを一人一人が知っていることが大事です。

日本の子宮がん検診受診率は、世界各国と比べて非常に低い状況が長年続いており、山口県のがん検診受診率は全国レベルよりもさらに低いのが現状です。

生来健康で、仕事を頑張ったり、これから妊娠を考えたたり、子育てを楽しんだり、とても輝いている20代～30代（出産年齢）の女性が、突然、不正出血を認め、産婦人科を慌てて受診。全く思いもしなかった進行子宮頸がんの告知。仕事、子育て、治療の不安を抱えながらのがん闘病生活。治療のために赤ちゃんを産めなくなるという本当につらい現実。これからは治療に伴う、尿が出にくくなったり、脚がひどくむくんだり、といった重い後遺症と一生付き合わなければいけない日々。

子宮頸がん、様々な苦しい思いをされながらも、懸命に頑張っておられる、多くの女性が身近にいらっしゃることを、そして、同じようなことは、誰にでも起こりえることを、日々診療に携わっている産婦人科医として、すべてのみなさんに知っていただきたいと思います。

「がん検診、きちんとうけておけばよかった。授かった赤ちゃん、産めてたかもしれないのに。いまでは、周りの人たちに子宮がん検診受けるように、すすめています。私と同じような大変な思い、絶対に誰にもしてほしくないの。」

子宮頸がんは、「本来予防すべき疾患」です。

2020年の節目を契機として、子宮頸がんという重大な病気を知っていただくこと、子宮がん検診の普及、そしてHPVワクチンの正しい情報の提供に力を注ぐことが、かかりつけ産婦人科医の大切な務めの一つであると日常診療を通じて改めて強く感じております。

人生100年時代、一生涯を健康に過ごすためには、婦人科検診を含めた自分自身のからだの定期的な管理はとても大切なことです。病気を知ることで健康を守りましょう。

山口県産婦人科医会

心配なことやわからないことがございましたら、お気軽にご相談ください。

今は、
子宮頸がんを
予防できる
時代です！

☆子宮頸がんとは、どういう病気？

子宮の入口（頸部）にできるガンで、日本全体で年間に約1万人が罹り、約2,800人が亡くなっています。

主な原因はがん化に関わるヒトパピローマウイルス（HPV）の持続感染です。100種類以上あるHPVのうち、発がん性のあるHPVは、ハイリスク HPVと呼ばれ、約15種類あり16型と18型のHPVが50～70%を占めています。その感染を予防するのがHPVワクチンです。

子宮頸がんには、扁平上皮がん（約75%）と腺がん（約20%）の2種類があります。そのうち、腺がんは、上皮表面の異常があらわれにくく、進行するまで、子宮がん検診で発見しにくいために、扁平上皮がん比べて、治療がより難しい病気です。その腺がんが、最近増えていることが問題なのですが、それに対しても、HPVワクチンでの予防が期待されます。

☆HPVワクチンは世界では今どうなっているの？

世界保健機関（WHO）は、HPVワクチンの安全性と有効性を世界に向けて声明として発表しており、世界80か国以上でHPVワクチンは定期接種化されています。なかでも、HPVワクチンと子宮頸がん検診が最も成功しているオーストラリアでは、2028年に世界に先駆けて新たな子宮頸がん患者はほぼいなくなるとのシミュレーションが報告されました。

☆では、HPVワクチンは日本では今どうなっているの？

日本では、HPVワクチンは、2013年4月に予防接種法に基づく定期接種となっていますが、同年6月に厚生労働省から「副反応の発生頻度がより明らかになり、適切な情報提供ができるまでの間、積極的な接種の勧奨を差し控える」との勧告があり、多くの市町村長の判断で接種対象者に対する個別通知を控えています。そのため、勧告前には、公費助成対象者の70%以上あった接種率は、HPVワクチンは現在でも定期接種として接種可能なワクチンであるにもかかわらず、0.3%以下と公費助成対象である女子のほとんどが接種していないという状況です。WHOは、日本での近年のHPVワクチンの積極的な接種の勧奨中止を憂慮する旨の声明を発表していましたが、最近では、2013年以降のHPVワクチンの効果や副反応に関する新しい調査結果を正しく伝えることで日本における接種者も少しずつ増えてきています。

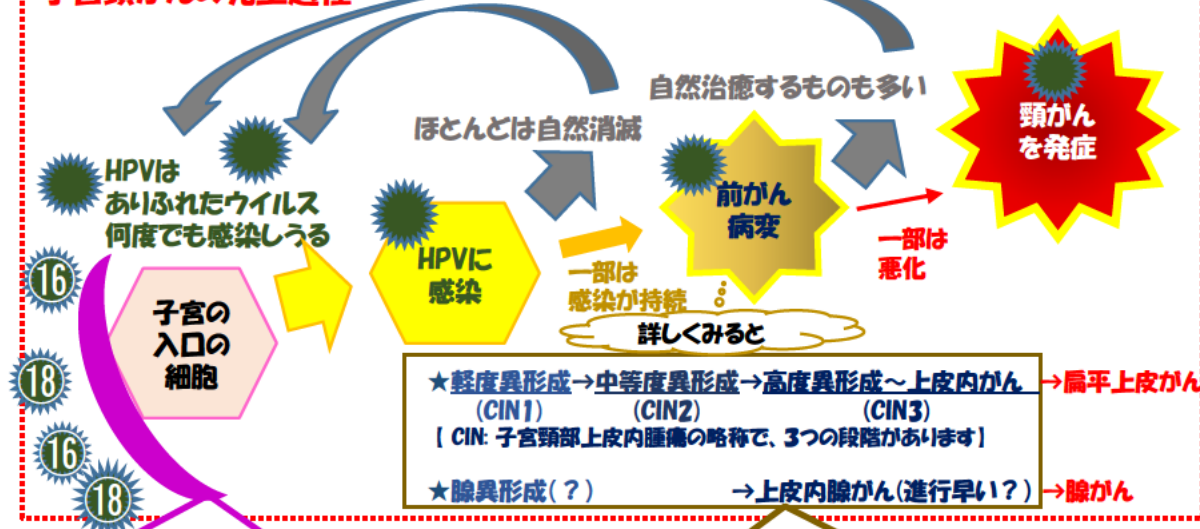
2020/1の厚生労働省の検討部会では、公費助成の接種対象者のいる家庭に、自治体を通じて、HPVワクチンの効果やリスクなどを知ってもらうための冊子とともに、各自治体で接種できる医療機関などの情報も併せて周知するために個別送付する方針を打ち出しています。

厚生労働省 HPVワクチン

検索

子宮頸がんの発生と2つの予防法

子宮頸がんの発生過程



予防法①HPVワクチン

3つの種類のワクチンがあります

- 1) 2価ワクチン: HPV 16/18に対するワクチン
- 2) 4価ワクチン: HPV 6/11/16/18に対するワクチン
- 3) 9価ワクチン: HPV 6/11/16/18/31/33/45/52/58に対するワクチン（9価ワクチンは日本では承認申請中）

○予防接種法に基づく定期接種（公費助成:無料）

対象: 小学6年生～高校1年生の女子
2価ワクチン、4価ワクチンともに、6か月の期間で、3回接種が必要のため、接種希望者には、高校1年の9月までに、1回目を始める必要があります

○任意接種（自費）

有効性が証明されている年齢層である45歳までの女性

予防法②子宮がん検診

市町村（対象年齢:20歳以上）、職場、医療機関が実施

細胞診検査が一般的で、特に痛みもありませんし、時間もかかりません

細胞診検査で、軽度の前がん病変の疑いがある場合は、原因ウイルスであるHPV検査もできるようになっています

☆HPV感染、前がん病変の段階、ごく早期の頸がんでは、自覚症状はまったくないので、がん検診を受けていただかないと見つかることはできないのです

☆子宮がん検診だけでは、子宮頸がんの予防には十分ではないの？

子宮がん検診の目的は、がんを早期に発見することはもとより、前がん病変の、それも軽い段階で発見して、手術（子宮摘出）を必要とするようながんの発生を予防することです。

進行したガンを治すためには、大きい手術や化学療法、放射線療法が必要になってきます。

前がん病変でも、がんの一手手前（高度異形成）まで進むと、円錐切除術という子宮頸部を部分的に切除する手術が必要になります。手術自体は比較的安全なものの、将来、妊娠・出産する場合に流産や早産につながる可能性があります。いいかえると、円錐切除術をうけると将来の妊娠時に自分のおなかの中の大切な赤ちゃんにも深刻な影響があるかもしれないのです。前がん病変のピークは、妊娠・出産年齢の20～30歳代ですから、HPVワクチンにより、円錐切除術を受ける若い女性を減らすことは意義があることです。